



駿府と今川氏

第15回

駿府へ流寓した公家と今川文化

公家たちはなぜ 駿府を目指したか

応仁・文明の乱以後、地方の莊園からの年貢によって生活を成り立たせていた公家たちにとっては受難の時代となった。各地で台頭し始めた戦国大名が莊園制そのものの否定に動き出したからである。

そのため、関白まで務めた経験のある九条政基の例のように、直接自ら自分の莊園に乗り込み、直接支配を行う者も現れた。

しかし、この九条政基の例ほどちらかといえれば例外で、生活に困った多くの公家は、何とか伝手を求めて台頭してきた新興の戦国大名を頼る形をとった。周防の大内氏、越前の朝倉氏、そしてここ駿府の今川氏が迎えた側の顕著な例であった。ちなみに、ここに掲げた三戦国大名の文化が戦国三文化である。

京都の公家が駿府に下向してきたのは、今川氏と公家との間に婚姻関係が結ばれていたからである。今川義忠の娘が正親町三条実望に嫁ぎ、中御門宣胤の娘寿桂尼が今川氏親に嫁いでおり、正親町三条家、中御門家の当主や一族が今川

氏を頼ってきており、さらに当主や一族だけでなく、彼らにつながる諸々の公家が下向してくるようになっていた。

京都文化伝播者としての公家

こうした公家たちの駿府流寓に対し、それを迎える側の今川氏にはどのようなメリットがあったのだろうか。端的に言ってしまうえば、京都風公家文化の享受ということになる。

例えば、駿府に流寓した公家の中に冷泉為和がいるが、冷泉家は藤原定家の直系のまさに和歌の名門であった。しかも、冷泉為和自身もこの時代を代表する歌人であり、その為和本人から和歌の手ほどきを受けることができたのである。

実際、今川家の開催する毎月恒例の「月次和歌会」に為和が出席している様子が彼の歌集である『為



▲滋賀県・平野神社の蹴鞠



▲冷泉為和の歌碑（葵区・報土寺）

撮影：水野 茂

和集』に見える。また、蹴鞠の名手だった飛鳥井雅綱も駿府に流寓しており、義元の子氏真は、この雅綱から蹴鞠の手ほどきを受けており、かなり上手だったと言われている。したがって、今川氏はわざわざ京都に行くことなく、駿府にいながらにして京都風公家文化を摂取することができ、自分たちの教養を高めることができたというわけである。

また、公家たちにしてみれば、生活の面倒をみてもらうお礼として、今川氏当主の義元やその子氏真、さらには重臣たちにも自分たちの「お家芸」を伝授していたということになる。